同時に來る悲しさである、併し、死んで行く人の心は、むしろ苦しい現實に、生るよりも死の幸福に、就く方がいゝかも知れない。瞬間の歡樂に憧れて強い刺激を求めつゝ生きて居る我等が、心の裡の淋しさを想ふたなら、自然の死は、むしろ樂かも知れない、大下氏の死を聽くと同時に、こんな感想が自分の胸の奥に浮みだした。

あゝ自分が死の命を、自然から受けるのは、此後何年の後であるだらう、其れ迄には、何度コスモスが咲いて、冬が來るだらう、毎年々々、自分のコスモスに對する思出は、多くなればと云つて、減じることはないだらう。

ことしも自分の庭には、ピンク色や、白のコスモスが、咲き亂れて、小形の蝶が、遊むで居る、灰色の日が毎日々々續いて、汽車や電車の、來ては過ぎ、過ぎ去つては、又來るのと、自分の心の淋しさと、妙な對照を示して居る、自然は今、紅や黄色の、華かな色彩に、瞬間の歡樂をゆめみて、再び沈默の、暗い冬の季節に入るのであらう

（十月二十二日大阪に於て稿）

余の眼を惹きたる水彩の小品

山縣五十雄

數年前、余が猶ほ萬朝報記者なりし間、上野に開かれた或洋畫展覽會を見に行つた時に、其處に出品せられた數多き畫幅のうちに、特に余の眼を惹きつけた二三の水彩の小品があつた、其取材の穩かにして、高尚なる其運筆の自然にしておとなしさ、其色彩の美くして脫俗なる、いづれも歎美に値へあるものがあつたが、とり分けて余を感服せしめた點は、此等の畫が、いづれも淸新の氣と溫雅なる風とを帶びて、觀る人の心を溫ため、おだやかにして、且つ湧然として美の感念を起さしむる事であつた。余はそれ等の畫を、此意味の

評を加へて、朝報紙上に於て紹介した。

其畫を描いた人は、大下藤次郎君であつた、當時余は、いまだ其人を知らず、名もいまだ聞かなかつたのであるが、右の評が紙上に掲載せられて後、二三日を經て大下君と交はれる一友人が訪ね來り、余に告げていふ「大下君は君の評を見て、大に喜んで居られた、何故なら大下君の理想は、正に君の述べた所にあるのである、大下君は敢て非凡の大作を出し、若くは新機軸を案出して、一世を驚かさんとするが如き野心は無い、其期する所は、人心を樂ましめ、美の感念を起さしむるにある、君は恰も大下君の理想を述べた大下君は知己の言であると言つて大に滿足して居られる」と、余は之を聞いて、大に大下君を慕はしく思ひ、右の友人を介して君と交りを訂した、大下君と余との交りは、斯の如くにして始まつたのである。

大下君は實に其作品の如き人であつて、溫厚にして、同情深く、上品で優雅で、余に對して交情常に溫かく互に相敬し、相信じて、數年の間、少しも冷却せぬ交りを續けた、君は實に余の誇りとする友人の一人であつたのである、君の思ひがけなき永眠は、余をして少なからず落膽せしめた。

「みづゑ」が非常の景氣

鵜澤四丁

顧みると、大下氏と知己になつたのはもう十一二年も前でした。氏が十二月の末に畫囊や三脚を携へて、靑梅に僕を訪ねてくれた、氏は自分の名刺を出して、自分は田山花袋君の友人で、こういふものです、何分よろしく。新年へかけて、この邊の寫生をするつもりだといふ事でした。氏は此頃から、新年を自宅に暮さぬ習であつたらしい。宿は坂上旅館へとるといふので、其夜直に訪問すると新年の繪ハガキを描いて、それに宛名を書いて居られた。種々な文學美術の話の末に、僕が曾てヴアンダイクの How to judge the picturce を譯した